

日本手外科学会特別会員に推挙されて

社会医療法人三車会 貴志川リハビリテーション病院 副院長 谷口 泰徳



この度は伝統ある日本手外科学会の特別会員にご推挙いただき大変光栄に存じます。会員の皆様には心から感謝を申し上げます。

私は和歌山県立医科大学を卒業し、整形外科教室に入局しました。私が手外科を始めるきっかけは、1986年7月に新潟手の外科研究所主催の手の外科セミナーに参加し、新潟大学整形外科田島達也教授の講義に感銘を受けたことでした。新潟手の外科セミナー参加後、すぐに手外科研修のための国内留学を、和歌山県立医科大学整形外科の玉置哲也教授に懇願しました。

玉置教授からは、当時津下健哉教授から生田義和教授に教授交代されたばかりの広島大学整形外科に研修に行く様に勧められました。そして1988年4月から1年間、広島大学整形外科生田義和教授、広島県立リハビリテーションセンター津下健哉所長に師事し手外科、マイクロサージャリーの研鑽を行いました。

その後は和歌山県立医科大学、関連病院で31年間にわたり手外科、マイクロサージャリーの臨床研究、診療、教育を続けてきました。2001年に日本整形外科学会からJOA-AOA Traveling Fellowに選出され、アメリカのKleinert Instituteなどの手外科施設での研修、交流が大変刺激になりました。臨床研究としては、キーンバック病、絞扼性末梢神経障害などに関する多くの論文発表をさせていただきました。2010年5月にキーンバック病の国際会議がオーストリアのウィーンで開催されましたが、この会議は、ウィーン出身のRobert Kienböck先生が1910年に世界ではじめてキーンバック病の論文を発表し、その100周年を記念して企画されました。この国際会議にシンポジストとして招待されキーンバック病について講演をさせていただいたことが、今では大切な思い出となっています。

日本手外科学会では、1999年より評議員・代議員を拝命し活動して参りました。その後、広報委員、施設認定委員、学会誌編集委員長として日本手外科学会のために微力ながら尽力させて頂きました。また学会役員として2017年から2年間、監事として職責を果たすことができました。特に2015年から5年間にわたり、編集委員長、アドバイザーに就任させていただきましたが、査読、編集、出版の業務のほか、投稿規定の改定、オンライン論文投稿システムの改善に取り組むことができました。

また2017年に学会奨励賞「田島達也賞・津下健哉賞」が若い手外科医の育成、学術研究の発展に寄与することを目的として創設されましたが、編集委員長として本賞の創設の一員として参加できたことは大変光栄に存じております。そしてこの奨励賞受賞者から未来の日本手外科学会を担う先生方が輩出されればこの上ない喜びです。

今後は手外科の診療を中心に地域医療の貢献に尽力していく所存です。引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

最後に日本手外科学会の今後の益々のご発展と会員皆様方のご健勝を祈念いたします。